世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

# 日本語文法の史的研究と日本語教育との接点：関西方言のウ音便と話し言葉におけるイ形容詞のエ段長音を例に



| メタデータ | 言語: Japanese |
|---|---|
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-06-27 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 劉, 志偉 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://mu.repo.nii.ac.jp/records/561 |

# 日本語文法の史的研究と日本語教育との接点

## ―関西方言のウ音便と話し言葉におけるイ形容詞のエ段長音を例に―

劉　志偉

**はじめに**

日本語には歴史があり、日本語史と呼ばれる。日本語学等を専門とする学習者を除き、日本語を学習する際に日本語史に関する知識は必須ではないのが一般認識であり、日本語史と日本語教育との接点はあまり重要視されていない。無論、すべての文法項目等を、日本語史にまで遡って指導を行う必要はない。ただし、日本語史の知識を有効に活用すれば、一部の文法項目の学習の手助けとなりうる。本稿は日本語史における「オ段長音化」と「エ段長音化」と呼ばれる現象を例に、日本語史の知識が現代日本語の学習に活用できることを論じる。

**1．日本語史における「オ段長音」と「エ段長音」**

日本語の音便として、一般的には、撥音便・促音便と併せて、ウ音便とイ音便が知られている。ウ音便とイ音便は共に子音の脱落現象で、それぞれ「CVウ音節」と「CVイ音節」（C：子音、V：母音）を構成し、日本語に「連接母音」（福嶋2002：41）をもたらしたとされている。

「CVウ音節」の史的変遷を辿る際には、「オ段長音」という用語が用いられ、漢字漢語を受容する過程において、本来の漢字音に由来する長音化（拗長音化を含む）が和語でも起こるようになったと考えられている。例えば、肥爪（2015）には長音化する漢語の用例として以下の用例が挙げられている。

カウ（高など）→コー（肥爪2015：44）
キウ（九など）→キュー（同上）
ケウ（教など）→キョー（同上）
コウ（口など）→コー（同上）

これらのうち、キウのような「iウ」型とケウのような「eウ」が先に拗長音化する。そして、カウのような「aウ」は、時代が下って江戸時代にコウのような「oウ」に統合され、両者の区別はなくなったとされる。「aウ」と「oウ」とは合流する

直前まで音声上区別されていたことが通説となっている。この現象は古典中国語音声学の用語を用いて「オ段長音の開合」と呼ばれる。（R：長音）

一方、「CVイ音節」の史的変遷については、江戸語のくだけた話し方に見られる「エ段長音」（イ段長音を含む）が注目される。この現象について肥爪（2015：45）は以下のような用例を挙げている。

/-ai/→/-eR/　せけへ（世界）、てへそう（大層）、はりゑへ（張合）

/-ui/→/-iR/　わりい（悪）、あっちい（熱）、いゝごん（遺言）

/-ei/→/-eR/　いせへ（威勢）、てへし（亭主）、ごこんれへ（御婚礼）

/-oi/→/-eR/　ふてへ（太）、おとてへ（一昨日）、おもしれへ（面白）

「CVウ音節」と「CVイ音節」の長母音化規則について古典語全般を踏まえ、肥爪（2015）では表1のようにまとめている[1]。

**表1　「CVウ音節」と「CVイ音節」の長母音化規則**

| 第一母音／第二母音 | | 前舌母音（-i） | 奥舌母音（u） |
|---|---|---|---|
| 狭母音 | 前舌（-i） | iR | juR |
| | 非前舌（u） | | uR |
| 非狭母音 | 前舌（e） | eR | joR |
| | 非前舌（a・o） | | oR |

（肥爪 2015：45「表3-1 二重母音の長母音化規則」による）

以上のような日本語史の知識は、主に日本語母語話者を対象とした日本語史の授業や概論で教授される内容である。日本語学習者がこうした日本語の史的変遷を必ずしも把握しておく必要は無いが、このような知識をうまく活用すれば、効率的な学習につなげることができる。以下、関西方言とイ形容詞の学習を例にこの点について論じる。

## 2. 関西方言のウ音便の学習への応用

劉（2016）では、いわゆる標準語としてはまだ認められないが、実際の日本語の使用においてかなりの広がりを見せる一部の表現について「準標準語」と称し、その1つとして関西方言を取り上げている。関西方言話者がテレビ番組等に多く現れることからも、関西方言を単なる日本語の主要な方言の1つとして扱うのみでは、日本滞在中の日本語学習者に不都合が生じる恐れがある。自然に習得できる部分もあるが、日本語学習者の立場からは、一定の体系をもって教えてほしいと感じる文法項目も多くある。代表格としては関西方言の活用（中でもウ音便）が挙げられる。劉（2016）に述べたように記述的な説明も可能であるが、本稿で主張するように通時的観点を取り入れることで現代語をより分かりやすく学習できるだけでなく、日本語そ

のものに対する理解を深めることも可能となる。

例えば、関西方言に見られるウ音便は、古典日本語にみられる活用の名残として見なすことができる。関西方言におけるウ音便を学習するに際しては、まず動詞とイ形容詞とに分ける必要がある。

動詞における狭義のウ音便は辞書形の語尾がウの動詞に限られ、テ形またはタ形の活用において確認される。劉（2016）で述べたように、語尾ウの直前の音に注目する必要がある。表2に示すように、史的変遷においては「iu」「eu」の場合、ウ段の拗長音化が起こるためか、現代語の動詞でこの二者の形態をとる動詞は極めて少ない[2]。「ou」は史的にオ段長音化現象があったが、実態としてはその辞書形に「テ」または「タ」を付した形である。また「uu」も辞書形に「テ」または「タ」が下接するのみの形であることを考え合わせると、動詞の場合は「au」の形態にのみ注目すればよいということになる[3]。日本語史におけるオ段長音化と同様に、ア段がオ段に合流するため、「かう」「うたう」における語尾ウの直前にある「か」と「た」はそれぞれ「こ」と「と」になる。

**表2　関西方言における動詞の活用への応用**

| 動詞型 | テ形・タ形の活用 | 史的変遷 | 学習する際の工夫 | 用例（テ形） |
|---|---|---|---|---|
| au | 買う<br>歌う | オ段長音 | aをoに変える | こうて<br>うとうて |
| iu | 吸う<br>振るう | ウ段拗長音 | — | すうて<br>ふるうて |
| uu | | | そのまま「テ」または「タ」に下接 | |
| eu | 無しと見なす | ウ段拗長音 | — | ようて |
| ou | 酔う<br>誘う | オ段長音 | そのまま「テ」または「タ」に下接 | さそうて |
| | 無しと見なす | | | |

一方、関西方言におけるイ形容詞のウ音便はテ形・「～ナイ」・「～ナル」が下接する際に見られる。辞書形の語尾イがウに変わるほか、その直前の音に注目する必要がある。中でも表3に示したように「ui」型と「oi」型の活用変化が最もシンプルで、動詞と同じ活用形をとるが、動詞の辞書形はそのままでよいのに対し、イ形容詞の場合は語尾の「イ」を「ウ」に改める必要がある。また、福島（2002）で述べられたように古典語ではわずかながら「ei」型のイ形容詞が存在したが後に消滅したため、現代語では語尾イの直前の音がエ段になっている形容詞は存在しない。すると、学習者にとって特に注意しなければならないのは「ai」型と「ii」型のみである。前者の「ai」型は動詞の場合と同様、語尾イの直前にある音がア段からオ段に変わる。同時に語尾「イ」が「ウ」となるが、ウの脱落を伴う場合がある[4]。これに対し、後者の「ii」型については史的変遷に見られた拗長音化が起こる。「おおきい」が「おおきゅう」に変化するように、「ii」型が「iゅう」に統一される。この活用に

関しては「シク活用の形容詞＋ございます」の知識を利用して学習することが可能である。例えば、「美味しゅうございます」がそれである。ただし、劉（2016）でも述べたように、現在は専ら拗長音化せず「大きない」「嬉しない」のようにウの脱落を伴う形式が主流である。なお、徳川・真田（1995）の調査結果によれば、イ形容詞のテ形の標準語化がかなり進んでいる。例えば、若い世代においては「くそうて」ではなく「くさくて」の使用が圧倒的優勢である。

**表3　関西方言におけるイ形容詞の活用**

| イ形容詞 | 辞書形の用例 | 史的変遷 | 学習する際の工夫 | 用例（～ない） |
|---|---|---|---|---|
| ai | 高い<br>臭い | オ段長音 | aをoに変える | たこ（う）ない<br>くそ（う）ない |
| ii | 大きい<br>嬉しい | 拗長音 | ii→iゅう | おおきゅうない<br>うれしゅうない |
| ui | 暑い | | 語尾のイがウに | あつ（う）なる |
| ei | 無しと見なす | 拗長音 | — | — |
| oi | 遅い | オ段長音 | 語尾のイがウに | おそ（う）なる |

## 3．話し言葉におけるイ形容詞の長音化学習への応用

話し言葉におけるイ形容詞の長音化は学習者にとって日々耳にする表現である。しかし、教育現場では、くだけた言い方とされるのみで、文法的に詳細に説明されることはない。学習者は、日常生活におけるインプットを頼りに学習する以外に、そのルールを知る術がない。文法的にはイ形容詞の語尾イの直前の音に注目する必要があるが、「（値段が）たけーな」のように「ai」型は最も耳にするタイプであるため、学習者が自然に習得し、一定のルール化（ア段をエ段に）を行うことも考えられる。しかし、「ai」型の変化に注目するあまり、学習者が「わりー、わりー」「マジだりー」のような「ui」型と「しぶてーな」のような「oi」型の長音化を耳にした時に即座に意味を理解できるかは疑問である。学習経験者の視点からすれば、こうした表現は教育現場ではくだけた表現という理由で教えられないことが多いが、日常生活で耳にするこれらの表現を理解するために扱うべき文法項目の1つと考えられる。日本語史におけるエ段長音現象（形容詞に限らない[5]）を踏まえた上で現代語におけるイ形容詞の長音化を説明することができる。具体的な説明は以下の通りである。

まず、表4に示すように語尾イの直前にある音に注目すると、「ai」型と「oi」型は共にエ段長音化する[6]。一方、「ui」型はエ段長音ではなく、イ段長音となる。ただし、イの直前がウの場合は長音化しない。例えば、「物憂い」「危うい」「なうい（死語）」等がそれである。一方、「嬉しい」「楽しい」に代表される「ii」型については「うれしー」「たのしー」と長音で発話されることもあるが[7]、特別に指導する必要はないと思われる。なお、前述の通り、現代語のイ形容詞には「ei」型が存在しない。

**表4　イ形容詞の長音化への応用**

| イ形容詞 | 辞書形用例 | 史的変遷 | | 実例 |
|---|---|---|---|---|
| ai | やばい<br>要らない<br>食べたい | エ段長音化 | eː | やべー<br>いらねー<br>たべてー |
| ii | 嬉しい | — | | — |
| ui | 寒い<br>悪い | イ段長音化 | iː | さみー[8]<br>わりー |
| ei | 無しと見なす | — | | — |
| oi | 凄い<br>酷い | エ段長音化 | eː | すげー<br>ひでー |

以上のほかに細かい補足ポイントが2点ある。[9]まず、語幹が一拍のイ形容詞（「憂い」「濃い」等）は長音化しない。[10]もう1つは語尾イの直前がヤ行とワ行の場合である。現代語では五十音図上イ段とウ段がないため学習者が長音化する際に戸惑う場合がある。「早い」「強い」「弱い」がそれぞれ「はえー」「つえー」「よえー」に変わるというように個別語彙として学習すればよいかと思われる。

## 4．日本語の史的研究[11]と日本語教育の接点

五十音図は悉曇学の影響を受けて誕生したとされ、古くから語源の説明等において、五十音図の各行または各段で音が交替する考え方が日本語の原理の説明として行われてきた。「同音相通」「同韻相通」「五音相通」等の用語がそれである。その後初期の連歌論や和歌作法においても五十音図の各行と各段の音に注目した記述が見られる。例えば、初期のテニヲハ論書には以下のような記述がある。

曽者宇具須津奴之通音（根来1979：7）
そのちにあまたのとまりあり五音第三の音にておさへたり
第三の音とはうくすつぬふむゆるふうわれそとふ
（根来1980：6）
古曽者兄計世手之通音（根来1979：6）
およそこそといへるとまり第四の音にてとまるへし第四の
音とはゑ江けせてねへめ江れへゑ物をこそおもへ
（根来1980：11）

これは句（歌）中の「ぞ」「こそ」がそれぞれ句（歌）末の「第三の音」（概ねウ段）と「第四の音」（概ねエ段）と呼応関係を成す現象についての指摘である。このような当時の邦人による文法意識を反映する言及が後の「係り結び研究」と「活用体系研究」の解明に光明をもたらしたとされている。

「五音」に代表される日本語の各行各段という視点から注目されてきたこれらの現象は日本語の特質の1つであると考えることができる。古典語の名残としての関西方言のウ音便と、「やべー」「ねえ」のような話し言葉も「五音（相通）」の枠組みの中で捉えることができる。テニヲハ論をはじめとする「五音」を当時の邦人の文法意識を反映するものとして位置づけるので

あれば、関西方言のウ音便といわゆる標準語におけるイ形容詞のエ段長音化の学習を「五音（相通）」の枠組みの中で捉えて学習することは学習者（の視点）による文法意識と見なすこともできる。以下、日本語の史的研究と日本語教育の接点を表5の通りにまとめる。

**表5　日本語の史的研究と日本語教育の接点**

| | テニヲハ論書 | 関西方言におけるウ音便 | いわゆる標準語におけるイ形容詞のエ段長音化 |
|---|---|---|---|
| 言語研究の区分 | 時間的文法研究 | 時間的・空間的文法研究 | 空間的文法研究 |
| 関連現象（内容） | 係り結び<br>活用体系 | ウ音便<br>（オ段長音の開合、拗長音化） | イ音便<br>（エ段長音化、イ段長音化） |
| 交替箇所 | 語尾<br>CVCV\| | 語幹（第一母音）<br>CVウ音節 | 語幹（第一母音）<br>CVイ音節 |
| 用語（現象） | 五音相通 | 用言の活用 | イ形容詞の長音化 |
| 位置づけ | 古典語 | 古典語の名残 | 江戸語の名残 |
| | 書き言葉 | 話し言葉 | 話し言葉 |
| | 邦人 | 日本語学習者 | 日本語学習者 |
| | 詠歌上の作法 | 日本語の文法項目 | 日本語の文法項目 |
| | 邦人による日本語に対する自覚 | 学習者の視点 | 学習者の視点 |

関西方言は所詮たくさんある日本語の方言のうちの1つに過ぎず、学習者の負担等を考えて特に学習者に教える必要がないとする立場もある。また、ぞんざいな話し言葉の代表格として取り上げられることの多いイ形容詞のエ段長音化も教育現場では取り上げられることは少なく、学習者は日々耳にしながらも、自然習得を頼るしかないのが現状である。しかし、本稿で示したように、日本語学習者の視点、すなわち外の目から日本語を見た場合、これらの言語現象も日本語の特質を示す一要素として見ることができるのである。

## 5．結び

学習者の負担等を考えても、日本語学習者が必ずしも古典語の文法を体系的に学習する必要はない（劉2015）。ただし、日本語史の通時的観点を部分的に取り入れ、その部分的な古典語の知識を有効に活用すれば、本稿で言及したような一部の文法現象または文法項目そのものを、より体系的に捉えることができる。そのような知識を学ぶことが学習負担の軽減にもつながる効果があると考えられるのである。日本語学習者にとって文法事項を学習するのだけでなく、本稿の提示したような説明内容は日本語そのものに対する理解を深めることにもなる。例えば、表6に示すように、一般名詞・固有名詞・古めかし表現・古典語の語彙等においては表記と実際の読みが異なる場合が多々見られる。本稿のような視点をもって理解すれば学習者は日頃から積もりに積もった一部のモヤモヤ感を解消することできよう。これは日本語に対する学習意欲の向上にもつながり得

る。無論、この点を強調しすぎると精神論の域に踏み入れかねないのでここで筆を置くこととするが、「筆が良ければ字がうまく書ける」のような教師側による指導論のみでは不十分で、学習者側の学習意欲や視点を完全無視してはならないことを申し添えておきたい。日本語教育においてもコーパスを活用した量的研究が主流になりつつあるが、それとは別に学習経験者の視点から学習者が求める文法項目の提示の仕方等の主観や経験に重きを置いた研究もまた重要である。

**表6　日本語学習における史的研究成果の応用**

| | 用例 |
|---|---|
| 一般名詞 | ・カル**シウ**ム<br>・**キウ**イ<br>・シンポ**ジウ**ム |
| 固有名詞 | ・源順（もなもとのした**がふ**）<br>・藤原公任（ふぢはらきん**たふ**）<br>・平塚らい**てう**<br>・か**のう**しまい（タレントの叶姉妹）<br>・**みう**みま（卓球の平野美宇・伊藤美誠ペア）<br>・プ**リウ**ス（トヨタの車種）<br>・き**りゅう**（日本の名字　桐生）<br>・は**にゅう**（日本の名字　羽生）<br>・わ**こう**（日本の名字　若生） |
| 古めかし表現 | ・～で**あらう**<br>・～で**せう**<br>・～ま**せう**<br>・～な**からう** |
| 古典語 | ・春のあけぼの。**やうやう**白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。（枕草子）<br>・ただ一人、徒より**まう**でけり。（徒然草）<br>・**苦しゅう**ない。**近こう**寄れ。（時代劇の台詞）<br>・君死に**たまふ**ことなかれ。（与謝野晶子） |
| 語源[12] | ・**けふ**【今日】<br>・**あふ**さか【逢坂（の関）】<br>・**てふてふ**【蝶々】<br>・**たふとぶ**【尊ぶ】<br>・**さぶらふ**【候】<br>・妹（いもひと→いもうと）<br>・弟（おとひと→おとうと）<br>・芳ばしい（かぐはし→かうばし）<br>・狩人（かりびと→かりうど）<br>・玄人（くろひと→くろうと）<br>・素人（しらひと→しらうと）<br>・相撲（一説、すまふ【争ふ】の連用形のウ音便に由来する）<br>・仲人（なかびと→なかうど）<br>・若人（わかびと→わかうど） |

| | |
|---|---|
| 敬語表現 | ・危のうございます。<br>・ありがとう存じます。<br>・ご機嫌麗しゅうお過ごし下さいませ。<br>・はい、はい、悪うございました。（皮肉）<br>・ようございました。 |
| 標準語として定着した挨拶の言葉 | ・ありがとうございます。<br>・おはようございます。<br>・おめでとうございます。<br>・ご機嫌よう。<br>・ようこそ。 |
| 標準語として定着した活用[13] | ・請うたかどうか<br>・問うて |
| 関西方言の学習 | ・～てし**もう**た（～てしまった）<br>・～**と（う）**ない（～たくない）<br>・それだけや**のう**て（それだけじゃなくて）<br>**のう**てもええんちゃう（なくてもいいんじゃない）<br>・『わ**ろ**てんか』（ＮＨＫ平成29年度後期連続テレビ小説のタイトル） |
| 若者言葉 | ・わろた |
| 個別語彙 | ・辛うじて（からくして→か**らう**じて）<br>・全うする（まったくする→まっ**たう**する） |

参考文献


浅川哲也・竹部歩美（2014）『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう

庵功雄（2011）「100％を目指さない文法の重要性」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房

庵功雄（2015）「「産出のための文法」に関する一考察―「100％を目指さない文法」再考―」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版

木田章義編（2013）『国語史を学ぶ人のために』世界思想社

小西いずみ（2016）「（ことばの意識を育てる）主体的表現者であるための地域方言・社会方言の学習」『日本語学』35－2、明治書院

小柳智一（2017）「（ことばの痕跡）文法変化と多義化―意味の重層化をめぐって―」『日本語学』36－2、明治書院

高山知明（1992）「日本語における連接母音の長母音化―その歴史的意味と発生の音声的条件―」『言語研究』101、日本言語学会

高山善行（2016）「（ことばの意識を育てる）現代語との対照を通して古典語を意識する」『日本語学』35－2、明治書院

徳川宗賢・真田信治編（1995）『関西方言の社会言語学』世界思想社

根来司解説（1979）『手爾葉大概抄 手爾葉大概抄之抄』和泉書院

根来司解説（1980）『手耳葉口伝』和泉書院

肥爪周二（2015）「3日本語の音韻の変遷」月本雅幸編『日本語概説』放送大学教育振興会

福島直恭（2002）『〈あぶないai〉が〈あぶねえe:〉にかわる時―日本語の変化の過程と定着―』笠間書院

馬洲和夫（1994）『国語音韻論』（第8版）、笠間書院

劉志偉（2015）「通時論的観点を部分的に取り入れた文法指導の試み

―旧派テニヲハ論書における「筒」（つつ）項目の記述に触発されて―」『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第2号、pp.19-36、武蔵野大学日本文学研究所
劉志偉（2016）「学習者の視点から見た「準標準語」文法項目について」『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第3号、pp.53-69、武蔵野大学日本文学研究所

付記

本稿は科学研究費助成事業若手研究（B）「有賀長伯のテニヲハ観に関する研究―『和歌八重垣』と『春樹顕秘増抄』を手がかりに―」（課題番号26770164）と基盤研究（C）「中国語話者から見たニア・ネイティブレベルを目指すための語彙に関する総合的研究」（課題番号16K02818）の助成による研究成果の一部である。なお、論文の執筆にあたり、中嶋徹氏のご協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表す。

脚注

1　音声学的にこれらの長音化発生の理由を考察した論に高山（1992）がある。

2　古典語における動詞の語尾「～ふ」が現代語では「～う」となる。「言う」に関しては「ゆうて」となるが、全体を包括的に捉えるために、ここでは個別の語彙として別に扱う。

3　これは庵（2011、2015）がいうところの「100％を目指さない文法」の理念に合致する文法説明の一例と考えることができる。文法を100％説明することは不可能であることに加えて、学習負担と学習の効率性のバランスも重要であり、そもそも文法を100％マスターする必要性はない。

4　関西方言ではウ音便の短音化、すなわち「ウの脱落」現象が見られる。詳細は劉（2016）を参照されたい。なお、イ形容詞については、いわゆる標準語の既習知識を活かして「クの脱落」と称することもできる。

5　例えば、「ちげーよ」という表現はよく耳にする。江戸語では形容詞・動詞のみならず、名詞等多くの品詞にわたってこの現象を確認することができる。例えば、江戸時代の江戸語では「世界」を「せけへ」と言ったりすることが知られている。

6　「潔い」のようにエ段長音化しない個別の事例がある。「いさぎいい」とも言えることから、「いい」または「良い」がエ段長音化しないことが影響しているとも考えられる。

7　「かっけー」という言い方がある。これは「かっこいい」の語尾イの直前ではなく、更に一拍前の「こ」がエ段長音したものであり、類推現象の1つにすぎない。ここでは個別語彙として扱う。

8　「さぶい」ともいう。これは「バマ相通」と呼ばれる現象である木田編（2013）。「さびしい」と「さみしい」や「けぶり」と「けむり」のように、古くから日本語においてバ行とマ行との交替現象が確認できる。

9　エ段長音（またはイ段長音）になりにくいものも認められる。ただし、「暗い」と「黒い」については同音衝突が生じるためエ段長音化しにくいとされるが、文脈によって意味の区別が可能なため、絶対にエ段長音化しないわけではない。また、「重い」の長音化形は、人称代名詞「お前」のより砕けた言い方「おめえ」とも同音衝突が生じるため、エ段長音化しないことも考えられるが、品詞やアクセントの違いがあるため言えないこともない。

10「良い」「いい」もエ段長音化しないが、同質ではないため個別語彙として扱う。

11　日本語史と日本語文法研究史の両方を指す。

12　濁点の移動の有無については鼻音性一致原則によって解釈される。

13　「請う」「問う」にテ形またはタ形が下接する時、促音便にならないのは、同形回避が働いて「凝る」「取る」に促音便の形を譲ったと解釈できる。つまり、「凝る」と「取る」と比べて、「請う」と「問う」を使用する場面が少なく、話し言葉ではそれぞれ「頼る」と「尋ねる」が使われやすいため、同形回避の結果として「請う」と「問う」がウ音便形で定着したと考えられる。また、「のたまうて」「のたまって」のようにウ音便と促音便の両形が共存する事例があることから、語幹の拍数も促音便になるかどうかにかかわる要因の一つと考えられる。例えば、「厭う」に関しては「いとって」「いとうて」の両形が拮抗する。「厭う」の場合、語幹が2拍であるため、同形回避の必要性が軽減される。しかし、話し言葉では「厭う」より「嫌う」の使用頻度が遙かに勝るためか、「いとう」に関しては馴染みが薄く、音便形にゆれをもたらしたと考えられる。